

# Music Laboratory を用いた初心者へのピアノ指導 — 読譜力の向上に着目して —

小倉 隆一郎\*

## The piano teaching at beginners using Music Laboratory — Focused on improvement of the Music-reading abilities —

Ryuichiro OGURA

**要旨** Music Laboratory を利用したピアノ・レッスンにおいて、特に初心者に関しては読譜力の不足が学習を進める上での妨げになっている。そこで、授業開始前に読譜力に関する予備調査を実施した結果、低音部譜表が読めない学生が 14.5%いることが分かった。対応策として、音名を記入させる形式で低音部譜表の読譜課題を作成し、2ヶ月間演習に取り入れた後、アンケート調査を行ったところ「読めなかった」と答えた学生は皆無であった。継続的に実施した低音部譜表の読譜トレーニングの一つの成果と考えられる。

キーワード：ML Music Laboratory キーボード ピアノレッスン 読譜力 低音部譜表

### 1. 問題

幼児・児童教育者養成校において Music Laboratory (以下 ML と略) を使ったピアノ指導について、昨年度、拙著に報告した。ここでは、とりわけ初心者のピアノ指導をサポートすることをねらいとして、演奏データを配信するシステムを考案し試行したところ、「(模範演奏に) 頼ってしまい楽譜が読めなくなる」といった問題点が現出した。そこで、今年度は、ML の授業に際し次の二点について留意することにより改善を図っている。

- (1) 楽譜の読み方等、楽典の説明を早期に行う。
- (2) 読譜トレーニングのための課題を提示する。

初心者がピアノの授業の中で適切な進捗を確保できない理由の一つに、読譜力の脆弱さがあげられる。教員養成課程において必要とされる広義の読譜力には主として次の三つの要素が含まれる。①音名をドレミ〜で読める (読譜)。②楽譜を見てキーボードで弾ける (視奏)。③楽譜を見て歌

える (視唱)。これらは基礎的なソルフェージュの能力であるが、今回は①に着目して改善を試行したため、テーマには「読譜力」というキーワードを含めた。

本論では、始めに ML 受講者の①音名をドレミ〜で読める (読譜) に関する予備調査を行い、その検討結果をもとに読譜力の向上をめざしたプログラムを工夫する。半期を経過したところで、中間調査として読譜および初見視奏の能力判定テストを実施する。これらの考察を通して、読譜力の向上へのさらなるアイデアを検討することが本論のねらいである。読譜および初見視奏の能力判定テストには、昨年来実施している演奏データの使用に関する簡単なアンケートを含めたい。演奏データの使用に関するアンケートは、昨年度のデータと今年度のものを比較・考察することを目的とする。

### 2. 読譜力に関する予備調査

#### 2.1 調査の対象と目的

学年初め、ML 授業の履修生を対象に、高音部

\*おぐら りゅういちろう 文教大学教育学部心理教育課程

譜表および低音部譜表上の音名を記入するテスト形式の調査用紙（付録1）を用意し、基本的な読譜力を評価する。

## 2.2 調査の内容と方法

高音部譜表上に12、低音部譜表上に12、計24個の全音符をそれぞれの音部譜表上にランダムに配し、音符の下にドレミ～の音名を記入する。調査用紙は無記名とする。音名は特定の基準音から類推するのではなく、即時に読めるかどうかを判定するため、記入時間を30秒と定めて実施した。

平成19年5月9日ML授業の始め10分を使い、調査の目的・記入の方法を説明、課題配布、記入、回収の順で実施した。

## 2.3 結果と考察

調査用紙の回収数76、有効サンプル数76。全体、男子、女子、個々の誤答率を明らかにするため、それぞれの母数を100%としたクロス集計を行った。

高音部譜表の読譜に関しては、女子は誤答数0、すべて正解であった。一方、男子は1音誤答が2名、2・3・4音誤答がそれぞれ1名ずつ、4名（20.8%）の学生が何らかの誤った回答をしている。誤答の詳しい内容をみると、1点ハは1、1

表1 高音部譜表の読譜力調査

誤答数	全体	男子	女子
	76 100.0%	24 100.0%	52 100.0%
0	71 93.4%	19 79.2%	52 100.0%
1	2 2.6%	2 8.3%	0 0.0%
2	1 1.3%	1 4.2%	0 0.0%
3	1 1.3%	1 4.2%	0 0.0%
4	1 1.3%	1 4.2%	0 0.0%

点イは1、2点ニは1、2点ホは3、2点ヘは2、2点トは3であり、とりわけ2点ニ以上の音に誤答が集中している。

低音部譜表の読譜について、男女合わせて56.6%の学生がすべて正しく答えられる一方、12問すべて誤答した人の割合が14.5%であった。読譜の基礎的な能力として問題の無い学生と、全く理解していない学生の二極化現象がみられる。男女比でいうと、全問誤答、すなわち低音部譜表が読めない学生は男子が25%、女子が9.6%であった。全問誤答でなくとも、半数以上間違った学生は、ヘ音記号を理解していながら、まだ即時に読むことができない。現在、本学で使用しているピアノのテキスト「大学ピアノ教本」（教育芸術社）は始めから低音部譜表を含む課題を取り扱っている。従って、半数以上誤って回答した学生のグループが、上のピアノ・テキストを読譜のトレーニング無しに進めることは無理がある。以上の結果

表2 低音部譜表の読譜力調査

誤答数	全体	男子	女子
	76 100.0%	24 100.0%	52 100.0%
0	43 56.6%	11 45.8%	32 100.0%
1	7 9.2%	2 8.3%	5 9.6%
2	6 7.9%	4 16.7%	2 3.8%
3	2 2.6%	0 0.0%	2 3.8%
4	2 2.6%	0 0.0%	2 3.8%
5	1 1.3%	0 0.0%	1 1.9%
6	2 2.6%	1 4.2%	1 1.9%
8	2 2.6%	0 0.0%	2 3.8%
12	11 14.5%	6 25.0%	5 9.6%

から、調査した 76 名中、低音部譜表が読めない 11 名 (14.5%)、即時に読めない 4 名 (5.4%)、計 15 名の学生に対する対応が当面の課題である。

### 3. 低音部譜表の読譜力向上をめざして

前章の調査から、低音部譜表が読めない学生が受講者の 14.5% いることが判明した。また高音部譜表に関しても 20.8% の学生が何らかの誤った回答を出している。これらの学生について、今年度、読譜力向上の対応としては、第一に楽譜の読み方を説明する単元を実質的な授業の始め（本講座では第 2 回授業時）に実施した。従来、楽典の基礎に関するまとめは授業や ML の使用法に習熟する 5 月中旬に行っていた。その理由として、この程度の読譜は中学校・高校の段階である程度身につけているものとの論者の思い込み、また身につけてほしいといった期待感があったことも見逃せない。しかし、楽譜を十分には読めないグループが存在することが分かった以上、まず始めに楽譜の読み方の基礎を理解させるべきである。

ピアノの学習における読譜について、田村・岩瀬は「譜読みは、鍵盤と楽譜の一致とスピーディーな譜読みがマスターされなければ、実際のレッスンには役立たない」（田村・岩瀬，2000）と述べている。読譜力向上の対応として、第二に低音部譜表の読譜課題を作成し、ML 授業内で適宜取り入れた。課題は低音部譜表上に「と音」から「一点ホ音」までの範囲で四分音符をランダムに配し、音符の上下の余白に音名を記入させるものである。課題の例として付録 2（低音部譜表を読む課題例）に添付する。小池らは、読譜力育成のため、4 から 12 小節の基礎的な旋律を視奏する課題を継続実施し、指導前後の調査を行った。その結果、「鍵盤楽器経験年数 1 年未満の女子と経験年数 1 年以上男女において、初見時における読譜力の育成に明らかに効果があることが分かった。しかしながら、経験年数 1 年未満男子においては、

顕著な効果は得られず期待できる結果とはならなかった。」（小池・上村・木村，2005）との報告がある。小池らの結果を考慮し、本論では経験年数 1 年未満の男子について、視奏する以前に「スピーディーな譜読み」を身につけさせることを目標として音名を記入する課題を採用した。実施にあたっては、主旨を説明し、受講者全員に強制するものではなく読譜力の必要性を認識した学生が教室前に置いた課題を自由に持参し、授業内に記入することとした。記入する分量も自由であるが、一度に 3 段、3 回の授業で 1 ページを終了する程度が良いとする目安は学生に伝えた。この課題を 5 月から 7 月初めまで実施した後、その効果の判定要素の一つとして読譜力と新曲視奏の調査を行った。次章に結果を報告する。

### 4. 低音部譜表の読譜および初見視奏の調査

#### 4.1 調査の対象と目的

半期 15 コマを経過した時点で、ML 授業の履修生を対象に、低音部譜表の 3 つの課題について視奏した後、アンケート形式による調査を行う。（付録 3 低音部譜表の読譜力についてのアンケート）低音部譜表における読譜力の定着度の判定を目的とする。また、昨年度実施した「演奏データの使用に関するアンケート」と同様な質問項目を本アンケートにも含めた。（付録 4 「大学ピアノ教本」演奏データの使用に関するアンケート）

#### 4.2 調査の内容と方法

課題は、A 四分音符のみの簡素なメロディー、B 付点四分音符と八分音符を含むメロディー、C 三和音による C,F,G7 のコード進行、の三種類とした。（付録 2）A は視唱と視奏、B・C は視奏の後、どの程度歌えたか、弾けたかについて、アンケートに答える。視唱および視奏は四分音符 = 60 のテンポを開始前に一度メトロノームにより提示した。「演奏データの使用に関するアンケー

ト」として、ピアノの進度、使用した演奏データの種類、演奏データの使用頻度、この三点の項目を裏面にプリントした。調査用紙は無記名とする。平成19年7月13日ML授業の始め15分を使い、調査の目的・記入の方法を説明、課題配布、記入、回収の順で実施した。

### 4.3 結果と考察

アンケート回収数77、有効サンプル数77

#### 4.4.1 低音部譜表の視唱・視奏に関する調査

低音部譜表における課題Aの視唱・視奏、課題BおよびCの視奏についてのアンケート結果をピアノの進度との関連でクロス集計を行った。ピアノ進度の番号(1~11)は図3の通り「大学ピアノ教本」(教育芸術社)の曲番号に対応している。

図3 ピアノ進度とテキストの番号

1. No.1~20	7. No.74~82
2. No.21~32	8. No.83~90
3. No.33~42	9. No.91~94
4. No.43~54	10.No.97以降
5. No.55~64	11. ソナチネ以上
6. No.65~73	

#### (1) 課題Aの読譜

読譜力に関する予備調査では76名中、低音部譜表が読めない学生が11名(14.5%)いたが、7月今回の調査では「読めなかった」と答えた学生は皆無であった。ピアノの進度が2~6までの20名(以降、初心者グループとする)中、1名は「ドレミですぐ読めた」、19名は「ゆっくりなら読めた」と答えている。これは、5月から実施した低音部譜表の読譜トレーニングの一つの成果と考えられる。

#### (2) 課題Aの視奏

四分音符のみで5小節の簡単なメロディーを新曲視奏する課題では、初心者のグループであっても「すぐ弾けた」が5名、「1回つかえた」が10名おり、MLの授業が初心者の読譜力養成に有効

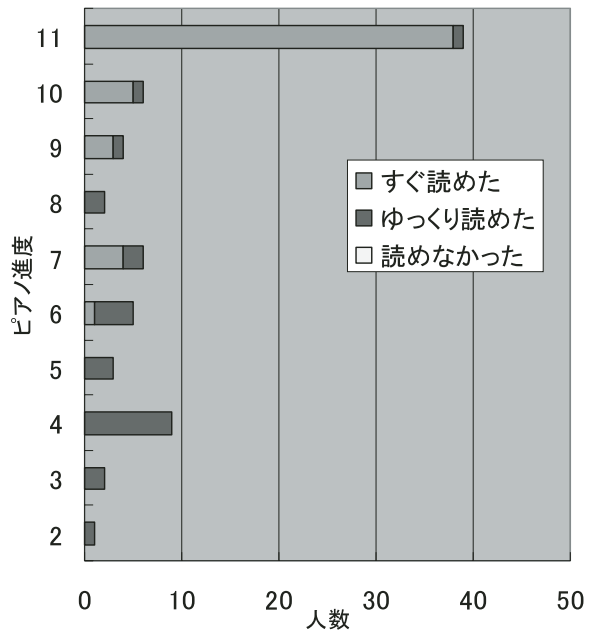


図4 課題Aの読譜

であったことが実証された。しかし、この基礎的な課題を「2回以上つかえた」と答えた5名の学生については対応が急がれる。また、ピアノ進度8の2名が「2回以上つかえた」と答えているのは、どうしたことであろう。偶然、不調で常々の力が発揮できなかった二人が進度8に集中したのであるだろうか。

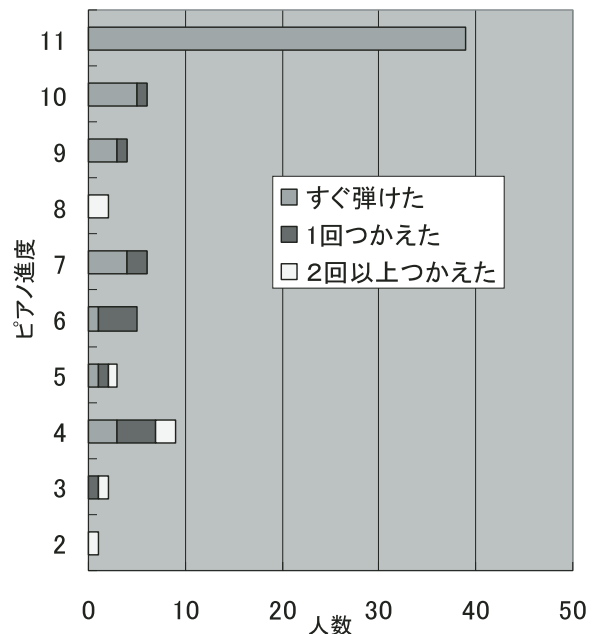


図5 課題Aの視奏

### (3) 課題 B の視奏

付点四分音符と八分音符の簡単なリズム変化を含む課題 B では、初心者グループの内、「2 回以上つかえた」が 14 名、「1 回つかえた」が 4 名であり、「すぐ弾けた」が 2 名であった。予測外であったのは、ピアノの進度が 7～11 の学生 57 名の中で、10 名が「2 回以上つかえた」と回答した点である。その内、4 名はすでにソナチネを弾いている進度 11 の学生である。ピアノの学習経験の長いグループのなかに、簡単な初見視奏を不得意とする学生がいるということである。初見視奏については、また今後の課題としたい。

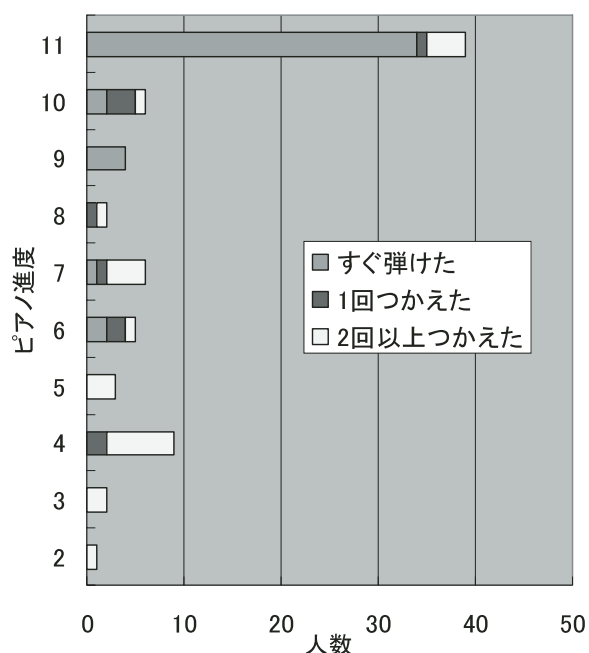


図 6 課題 B の視奏

### (4) 課題 C の視奏

課題 C は三和音による C,F,G7 のコードを用いた低音部譜表の和音課題である。初心者グループでは、「2 回以上つかえた」が 11 名であるが、「すぐ弾けた」と「1 回つかえた」を合わせると 9 名であった。本学ではコードネームによる伴奏法の学習は 3 年次に取り扱うが、簡単な和音視奏は伴奏法の基礎となるため、ピアノの進度を問わず実践力の向上をめざしたい。

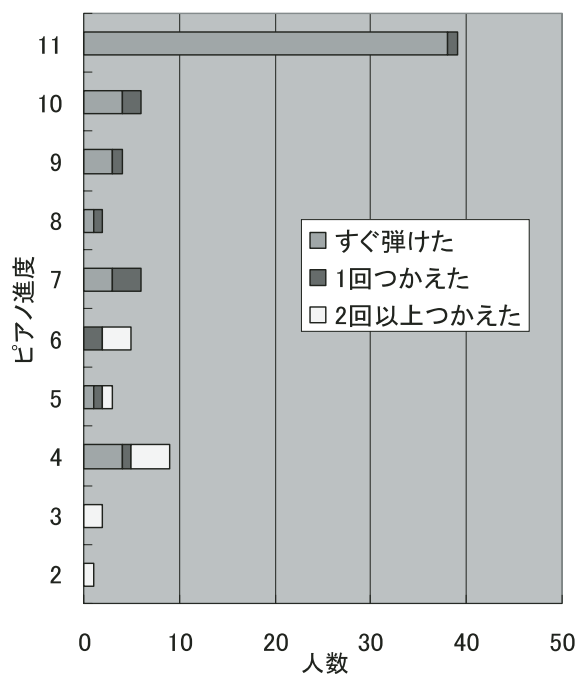


図 7 課題 C の視奏

### 4.4.2 演奏データの使用に関するアンケート

#### (1) ピアノの進度と人数の集計

進度 2～6 の初心者グループに男子学生が集中していることが分かる。7 月中旬、ML 授業を始めて 12 コマを経過した時点で、進度 2 が 1 名、進度 3 が 2 名、進度 4 が 9 名であった。進度 2 と

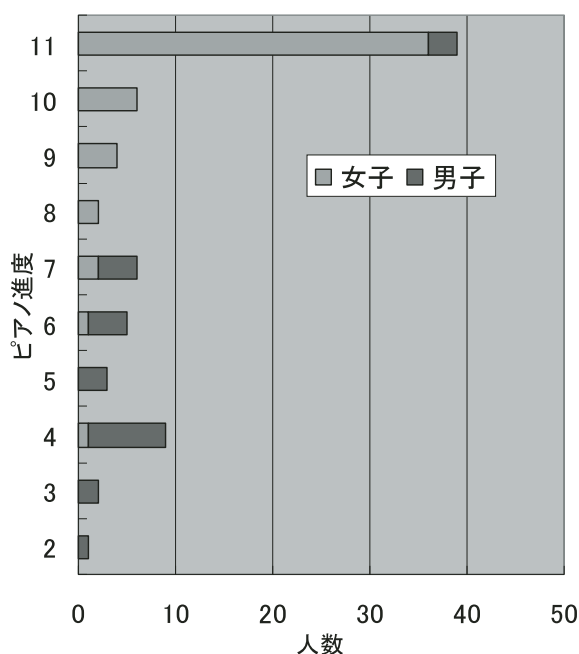


図 8 ピアノの進度と人数の集計

進度4にそれぞれ1名ずつ出席不良の学生が含まれる。進度4以下で出席状態の良い、すなわち真面目に練習しているにもかかわらず進度が低い10名の対応が急務であろう。

(2) 使用した演奏データの種類

演奏データは次の3種類を用意した。1.ML室クラビノーヴァ用フロッピーディスク（以下、FDと略）、2.文教大学ネットワーク内の専用フォルダ、3.携帯電話用ウェブサイト内。結果、今回のアンケートでは1のみが使われ、2と3は皆無であった。昨年度のアンケートで2と3はほとんど使用されなかったため、本年度は使用するメディアの説明をFDを主とし、授業内で1回説明することとどめたことが原因と考えられる。

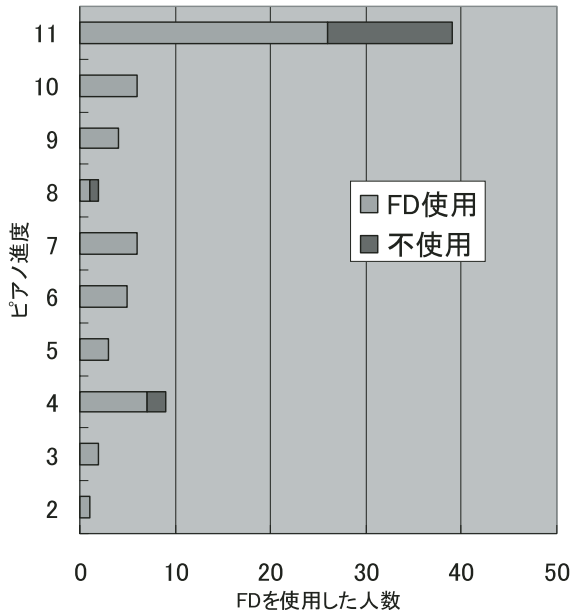


図9 演奏データの使用

今年度は演奏データの使用について、「楽譜が読めなくなる」といった反省点を受講生に周知させ、適切に使うよう指導したことが要因の一つであろう。ピアノ進度11（ソナチネ以上）について、昨年度はFDを「使った」が3名と「使わなかった」が15名であったが、今年度は「毎授業時に利用した」と「不使用」がともに13名であった。演奏データは「大学ピアノ教本」の曲であり、ソナチネ以上の曲は含まないため、ピアノの進度が高い学生は利用しないのは当然である。一方、進度が高いにもかかわらず演奏データを頻繁に使用したのは、学年始めに中程度から学習を開始し、努力の結果進度11まで到達したケースが考えられる。MLの授業態度は、昨年度と比較して特に違いは認められなかったが、結果として今年、進度を伸ばした学生は多かった。

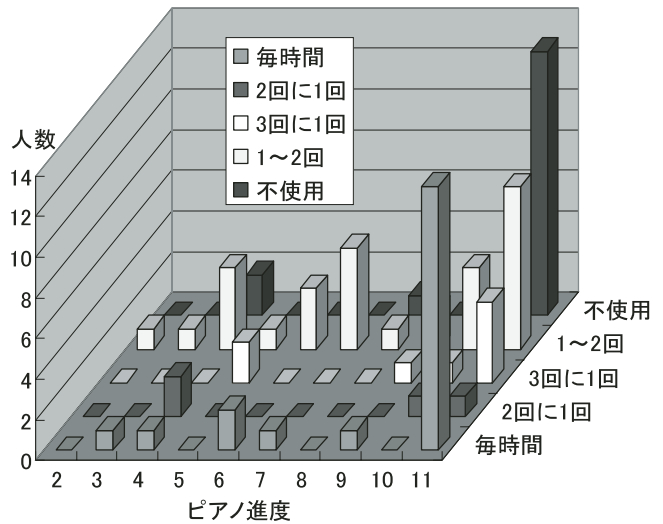


図10 FDの使用頻度

(3) フロッピーディスクを使用した頻度

初心者のグループでは、「毎時間使用した」学生が4名、「2回に1回」と「3回に1回」がそれぞれ2名、5月から7月を通して「1～2回利用した」のみと答えた学生が10名、「不使用」が2名であった。昨年度と同じ内容のアンケートでは、FDを使用した学生の内、72.1%は「ほとんど毎授業時に利用した」（小倉，2006）とあるので、今年度は昨年度に比較してFDの使用率は低い。

5. おわりに

本学ではピアノの個人または少数人数グループによるレッスンは実施せず、鍵盤楽器の技術指導はすべてMLの授業形態で行っている。最多で42名といったクラスがあるため、学生個々の進度に合わせたレッスンを実践すること、とりわけ初心者における基礎の指導には苦慮している。一方、

本学は学習意欲の高い学生が多いことを理由に、ピアノを自ら学べる学生を育てたいと考えている。大人数の ML 授業では大半の時間をピアノの自主練習に当てることは避けられない。従って、学生が自ら学ぶ意欲と姿勢をもっていることが進歩の大事な要素となるであろう。

昨年度、演奏データを提示した際の反省点「(模範演奏に)頼ってしまい楽譜が読めなくなる」ことへの対応として、今年、音名を記入させる形式で低音部譜表の読譜課題を継続実施した結果、低音部譜表を読むことができなかった学生も、少なくともゆっくりなら読める程度の力がつき、一応の効果は認められた。本論では、読譜力に関する予備調査と中間調査を行ったが、予備調査はテスト形式であり、中間調査はテスト後アンケートに答える形式としたため、二つの調査データを単純に数値として比較することはできなかった。将来、データの比較を目的として調査を行う場合、

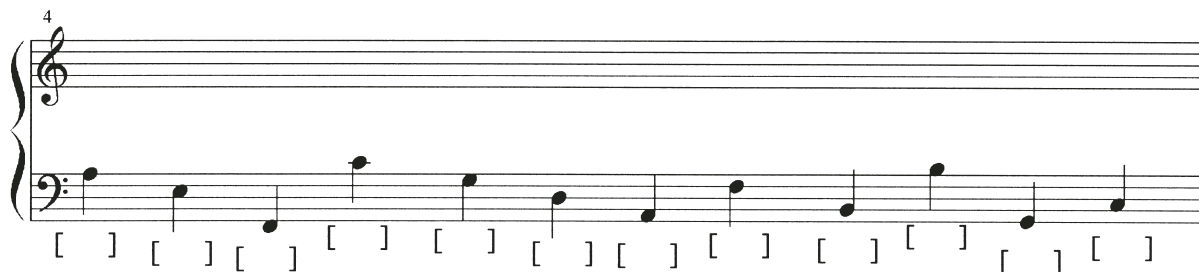
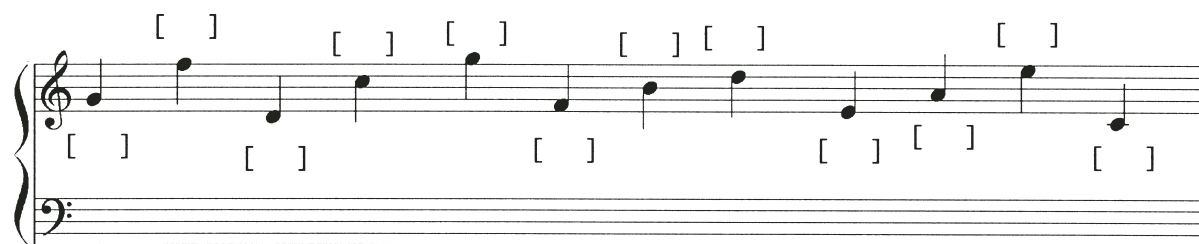
調査形式の整合性に考慮したい。アンケート結果から、今年度は昨年度に比較して FD の使用率、すなわち模範演奏を参考にした学生の割合が低いことが分かった。また、ピアノの学習経験の長いグループのなかに、簡単な初見視奏を不得意とする学生がいることも明らかになり、今後の研究課題として検討を進めたい。

#### 引用文献

- 小倉隆一郎 (2006) 「音楽授業における MIDI 演奏データの活用ーネットワークとフロッピーディスクを利用するー」『文教大学教育学部研究紀要』第 40 号 (20061220), pp. 43-53.
- 小池美知子・上村聖子・木村真由美 (2005) 「保育者養成における鍵盤楽器指導に関する研究 (3)ー読譜力育成のための指導についてー」『今治明德短期大学紀要』第 29 集, pp.27-39.
- 田村智子・岩瀬洋子 (2000) 「音符を読む (1)」『ムジカノーヴァ』31 (5) (通号 351), pp.30-38.

#### 付録 1 読譜力の予備調査のための課題 (段間等を縮小して掲載)

[ ] 内にドレミ〜で音名を書きなさい



付録2 低音部譜表を読む課題（一部分を縮小して掲載）

低音部譜表を読む課題



(実際の課題は A4 用紙に 9 段 27 小節の楽譜である.)

付録3 低音部譜表の読譜力についてのアンケート

□A ドレミ〜で読み、初見で弾いた後、下の当てはまる番号に○をつけてください。♩ = 60



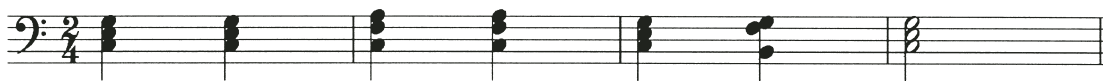
1. ドレミですぐ読めた      2. ゆっくりなら読めた      3. 読めなかった  
 1. すぐ弾けた              2. 1回つかえた              3. 2回以上つかえた

□B 初見で弾いた後、下の当てはまる番号に○をつけてください。♩ = 60



1. すぐ弾けた              2. 1回つかえた              3. 2回以上つかえた

□C 初見で弾いた後、下の当てはまる番号に○をつけてください。♩ = 60



1. すぐ弾けた              2. 1回つかえた              3. 2回以上つかえた

※授業への要望や意見がありましたら、下に記入してください。

ご協力ありがとうございました。今後の授業の改善に役立てます。

H19/7



付録4 「大学ピアノ教本」演奏データの使用に関するアンケート

① 所属と男女の別

- |              |       |
|--------------|-------|
| 1. 幼児心理教育コース | 1. 男子 |
| 2. 児童心理教育コース | 2. 女子 |

② 現在のピアノの進度

- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| 1. No.1 ~ 20  | 5. No.55 ~ 64 | 9. No.91 ~ 94 |
| 2. No.21 ~ 32 | 6. No.65 ~ 73 | 10. No.97 以降  |
| 3. No.33 ~ 42 | 7. No.74 ~ 82 | 11. ソナチネ以上    |
| 4. No.43 ~ 54 | 8. No.83 ~ 90 |               |

③ 使用した演奏データの種類 (複数に○印つけて結構です。使わなかった人は無印)

1. ML 室クラビノーヴァ用フロッピーディスクの演奏データ
2. 文教大学ホームページ (Teacher work) 内の演奏データ
3. 携帯電話用ウェブサイト (<http://ogura.tk/>) 内の演奏データ

④ ML 室クラビノーヴァ用フロッピーディスクの演奏データを授業で利用した人は

1. ほとんど毎授業時に利用した
2. 2回に1回ほど利用した
3. 3回に1回ほど利用した
4. 1~2回利用した